

## つらら

見事なつららです。

1年生は、1月28日から30日まで、菅平高原スキー場にてスキー移動教室に行ってきました。初の宿泊行事に生徒達は期待をふくらませました。宿舎に到着すると、玄関脇の見事な“つらら”によるお出迎えです。宿舎となるホテルニューダボスは先代社長の頃からお世話になり、10年前の小澤の所属する学年の清瀬中スキー教室もこのお宿で学びました。女将さんとの再会を喜びました。繋がりをご縁を確認しました。

昼食後、ホテル前広場にて、開講式です。各班のインストラクターさんの紹介です。早速ゲレンデの

平らな部分に移動しました。片側に板を履き、歩く。続いて両足に板を履



き、ハの字の練習です。ちょっとした坂を下り、それをまた登る。この動作の繰り返しは、生徒にとってなかなか堪えるようです。スキー板を履いたことによって不自由となり転ぶ。痛い思いを乗り越え、何度も立ち上がりました。この不便さを知るから、リフトという便利な存在が、ありがたく思えるのです。生徒達は上達が何しろ早い。目を離すすきをつくってはいけません。間もなく斜面を滑り始めました。



1月27日の国語は、『不便』について。人間は、便利さを求めて合理的に物



事が進むよう発明をしてきました。しかし、不便には不便の魅力があるというのです。「パソコンを使うので漢字を思い出せない」よく聞く言葉です。手書きは時間を要しますが、自らの記憶を頼りに漢字を文字化しますから、脳を使います。何より相手に温もりが伝わります。便利を追求し、例えば野球でセンサー付きのバットが開発され、いつでもヒットが打てるのなら、練習の必要がなくなります。便利を求めすぎて、便利ばかりが先走り、人から生活する事や成長する事を奪ってはいけません。不便な生活は、人々を鍛え、心豊かにし、工夫を創造してきました。この「不便」によって得られる益のことを「不便益」というそうです。不便に“益”があるなどと考えたこともありませんでした。不勉強でした。

スキー教室に話を戻します。生徒たちの話の聞き方について、複数の学年教員から生徒に語る場面がありました。実行委員が前に立ち、話をしているのに他は聞こうしない。教員が説明していても、全く脳にインプットしておらず、結果、やり方がわからない。そんな場面が多々ありました。「自分が聞いていなくても、誰かがやってくれる、」誰かに聞けばいいという意識、悪しき“便利”の弊害です。“不便”は、まず自分事になるという点が上げられます。物事が自動的に進まず、不便だからこそ自分で手間をかけられたり、工夫したりできるわけです。話を自分ごととして聞き取ることは自分を成長させる一歩目です。そして、話し手の目を見て、聞いていますという思いを届ける、その繰り返しは人との繋がりをも深め、自らの心を豊かにしていくのです。

帰りのバスの出発を見送りにきてくださったインストラクターさんと名残を惜しんでいる生徒の姿にご縁を感じます。きっと、上手いいかないという不便を克服するために懸命に話を聴いたことが繋がりを深くしたのでしょう。

つららの語源は「連連(つらつら)」で「氷が途切れず長く連なっている」という意だといえます。玄関横の見事なつららは、女将さんの粋な演出であったと思えてなりません。パソコンを閉じて、久々にお世話になった女将さんにお礼の手紙をしたためるため筆をとります。

縁はあるものではなく、紡ぐものです。